

今後のキャリア教育の方向性について

棚倉町教育委員会

1 中教審答申から

今年1月に中教審答申「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」が出た。

答申では、「教育課程」の在り方新学習指導要領における「学びに向かう力、人間性等」と「キャリア教育」をつなげて、次のように述べている。

- 新学習指導要領において育成を目指す資質・能力のうち、「学びに向かう力、人間性等」については、主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や、自己の感情や行動を統制する力、よりよい生活や人間関係を自主的に形成する態度等を育成することとされている。また、児童生徒が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要としてつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ることとされている。

2つを関連して述べていることから、キャリア教育の資質・能力は、「学びに向かう力、人間性等」で育成する資質・能力と深い関わりがあり、同じ方向性、趣旨で評価できるのではないかということがうかがえる。

「学びに向かう力、人間性等」の育成については、次のように述べられている。

- 学びに向かう力の育成は幼児期から成人までかけて徐々に進んでいくものであるが、初期の試行錯誤段階を経て、様々な学びの進め方や思考ツールなどを知り、経験していくことが重要である。とりわけ小学校中学年以降、学習の目標や教材について理解し、計画を立て、見通しをもって学習し、その過程や達成状況を評価して次につなげるなど、学習の進め方を自ら調整していくことができるよう、発達の段階に配慮しながら指導することが大切である。また、中学校以降において、多様な学習の進め方を実践できる環境を整えることも重要である。

授業改善に当たっても、学習の進め方（学習計画、学習方法、自己評価等）を自ら調整する力を身に付けさせることを一つの柱として行うことが考えられる。また、学校の授業以外の場における学習の習慣や進め方についても視野に入れ、指導を行うことが重要である。

下線部分では、自己マネジメント力の育成を図っていくことの重要性が指摘されている。自己マネジメント力の育成もキャリア教育の成果として、「学びに向かう力、人間性等」の観点で評価し、伸ばしていくことができると考えてよいであろう。

さて、令和の日本型学校教育では、「キャリア教育」は、次のような方向で充実を求められている。

- また、キャリア教育の充実に当たっては、小学校から高等学校までを通じ、各教科等での指導を含む学校教育全体でその実践を行いつつ、総合的な学習の時間において教科等を横断して自ら学習テーマを設定し探究する活動や、特別活動において自らの学習状況やキャリア形成を見通したり振り返ったりしながら、自身の変容や成長を自己評価する学習活動などを充実していくことが求められる。この中で、キャリア・パスポート等も活用し、児童生徒が自覚するまでに至っていない成長や変容に気付いて指摘したり、一人一人が自らの成長を肯定的に認識できるように働きかけたりするなど、教師が対話的な関わりを持ち相互作用の中でキャリアを創り上げていくことが不可欠である。

現在、本町の学校教育で志向されている「総合的な学習の時間」及び「学級活動」の充実、「キャリアパスポートによるガイダンスとカウンセリング」が今後の方向性であることが明らかになった。

自己マネジメント力と探究的な学習過程、見通しや振り返りは、自己の目標、課題設定、課題解決、振り返り、新しい課題設定を重視している点で共通している。

2 点検評価委員会での指摘から

棚倉町教育委員会点検評価委員会では、本町のキャリア教育実践について、次のような指摘もいただいた。

- RVPDCAを積極的に行っていただき、今後は、よりスピード感をもって（期間をより短くする方向で）取り組んでいただきたい。（RV-SPDCA）
- キャリア教育には、保護者の意識向上が必要である。シンポジウム等への多数の保護者参加とPR活動を期待したい。
- 先生方にとってメリットが感じられるようなICT活用やキャリア教育であるために、他の事務の合理化も併せて考えていただきたい。

本町で行われている四半期制（3ヶ月を単位としたRVPDCA）を一層進め、保護者をはじめとする地域住民や、町外への発信を充実させ、学校教育における働き方改革（スクラップ&ビルド）が必要なのではないかという指摘である。

四半期制が提起している問題は、評価サイクルの短期間化の他に、必ずしも評価を学期末に合わせる必要がないことを示唆している。特に3学期制では、評価が終わると長期休業が始まり、休業後に仕切り直しが必要になるので、評価と指導が一体化しにくい。

キャリア教育の成果を発信することで地域総ぐるみの取組を促進し効果を上げ、指導と評価を一体化し、日常的に資質・能力を育成することで、教師の負担を軽減できる。

3 教頭会による各校の実践発表から

2月25日に行われた町教頭会では、町内各校において、次の成果が共通に確認された。

- 取組に多少のずれはあるものの、各校とも育てたい基礎的・汎用的能力を「ほめポイント」の形で具体化して実践し、伸びた子どもの事例を報告していること。
- 児童・生徒の目標設定（学習や生活）を重視し、「キャリアカード」「交流活動カード」「キャリアカード」などのキャリアパスポート、「キャリアカード」、「自己管理型手帳」「生活ノート」「スケジュールプランナー」などの学習計画表をもとにして自己マネジメント力を育成しようとしていること。
- キャリア意識調査やQ-Uテストなどの調査結果を基に、キャリア教育の視点から個や集団に対するアプローチを試みて成果を挙げ、その方法を明らかにしたこと。

また、学校の特徴を生かしながら、次の成果も報告されている。

- タブレットを用いて、「自由研究発表会」「オンライン授業」「プログラミング教育」に取り組むなど、限られた機器を最大限に利用し、各教科、道徳、総合的な学習の時間などで多様なICT活用が図られたこと。また、ロイロノート、ジャムボードなどを用いたプレゼン、エムボットでのプログラミング学習などが実践された。
- 不登校、統廃合、学級崩壊の危機などの学校の課題を、キャリア教育の視点から資質・能力を育成しつつ、組織的に対応し成果を挙げたこと。
- 学校評価における児童評価、保護者評価、教師の評価のずれに着目し、キャリアパスポートに保護者のコメントをいただくなどの発信方法を工夫し、「ほめポイント」を保護者と共有し成果を挙げたこと。

4 幼稚園での実践から

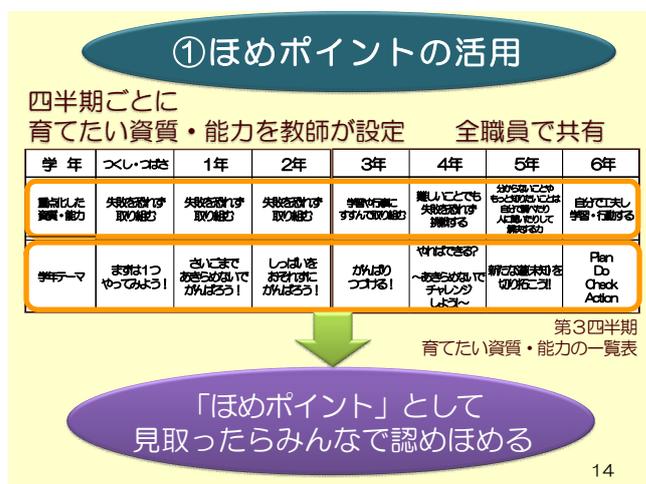
キャリア教育シンポジウムにおける社川幼稚園の実践発表、高野幼稚園での学校評価の実践研究から、次の点が明らかになった。

- 幼稚園教育要領に示されている幼稚園教育において育みたい資質・能力「意識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」が育まれている具体的な姿である「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とキャリア教育で育む「社会的・職業的自立に必要な基盤となる資質・能力」（4つの基礎的・汎用的能力）をすり合わせることで、両者が整合することを確認できた。
- それによって、幼稚園においてもキャリア教育の視点に立って資質・能力を育成し、小学校と中学校で育てるべき資質・能力と共有することができた。
- 幼稚園で遊びを通して育成した資質・能力を、砂遊び等の活動を媒介にして、小学校の生活科や図画工作科でも伸ばすことができることを確認できた。

5 研究指定校による研究成果から

研究指定校である棚倉小学校の実践から、次の点が明らかになった。

全教育活動をキャリア教育の視点で捉え、「なりたい自分」の姿をイメージさせた上で目標を設定させ、主体的・対話的で深い学びが実現できる場を設定するとともに、「ほめポイント」による資質・能力の育成と共有化、地域の教育資源の発掘と活用、キャリア4能力の視点での適切な指導を取り入れたカリキュラムマネジメントをおこなえば、児童は「なりたい自分」になる経験を積み重ね、学び続ける姿を持続させながら共生社会の担い手として自立した人間となっていく。



特に、左のように、四半期ごとに育てたい資質・能力を教師が設定し、「ほめポイント」の形で具体化し、子どもにも意識させ、四半期ごとに評価して新たな目標をもつ取組は、藤田晃之教授や長田徹調査官から、高く評価されている。

この取組の本質は、「必ずしも学期制と評価回数を合わせる必要はない」ということである。ここから次の方針が構想できる。

- 基礎的・汎用的能力の指導と評価においては、必ずしも学期と評価を合わせる必要がなく、こまめに評価を行いその結果をもとに指導していくことが必要である。
- 2学期制であれば四半期としてその中間に、3学期制であればその中間に、評価をもとにこまめに指導することで、資質・能力を伸ばすことにつながる。
- 大切なことは、「評価して長期休業」という従来のシステムに固執しては、資質・能力を十分に伸ばせないのではないかとということである。

なお、次年度は、棚倉中学校も教育課程の研究指定をする。現在、「立志式」を中心に据えた、「志を求め、志を立て、志に向かう」という柱をもとに、総合的な学習の時間や学級活動の計画を検討していただいている。

6 次年度の「学校教育経営改革プラン」について

以上の成果から、来年度のキャリア教育を別紙の様に構想した。

プランにおいて、保育園、幼稚園や高等学校とのつながりを明らかにし、地域の教育資源や関係機関との連携のもと、棚倉型サイクル学習による自己マネジメント力の向上と幼・小・中・高における資質・能力の育成によって、「夢をつなぎ、志を育む」本町のキャリア教育の方向性を提案したい。